

M.K. ガーンディーとグジャラートの言語・文学¹⁾

井 坂 理 穂*

M.K. Gandhi on Gujarati Language and Literature

ISAKA Riho*

This paper analyzes M.K. Gandhi's ideas on Gujarati language and literature. It aims to understand what kind of language and literature he tried to create and what influence his attempts had on Gujarati society, both in his own time and in later periods. Gandhi stressed the importance of developing a language and literature which all people, regardless of educational background and religious affiliation, could share in common. Thus he repeatedly advocated 'simple' Gujarati and encouraged writers to develop literature for the 'people'. Yet, at the same time, his ideas on 'correct' Gujarati and 'useful' literature often reflected those of high-caste Hindu literati. Furthermore, in his 'experiment', Gandhi assigned these literati a leading role, and thus contributed to the enhancement of their leadership. This, in turn, often resulted in the imposition of their conceptions of language and literature on those who did not share them. Although Gandhi's influence can be still observed in post-colonial Gujarat, it is also important to take note of more recent attempts among the Adivasis and the Kachchhis to educate their children through their own languages, and those among the Dalits to promote their own literature.

は じ め に

本稿は、モーハンダース・カラムチャンド・ガーンディー (Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948) が、彼の出身地であるグジャラートの言語・文学に関してどのような見解を示していたのかに焦点をあてながら、ガーンディーの言語・文学観の特徴や、それらが同時代や独立後のインド社会に対してもっていた意味を考察するものである。ガーンディーに関しては、彼の著書、新聞などに発表した論稿、演説、書簡、電報、彼へのインタビュー記事などの膨大な数の文書を時代順に収録した『ガーンディー全集』(英語版、ヒンディー語版、グジャラーティー語版がある)²⁾をはじめ、豊富な資料が出版されている。³⁾ また、これらの資料をもとに、世界各地の多数の研究者によって、彼の生涯や活動、思想の諸側面に関する研究が

* 東京大学大学院総合文化研究科, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo
2008 年 7 月 25 日受付, 2008 年 11 月 21 日受理

なされている。ガンディーの言語・文学観についても、英語使用に対する批判、母語の重視、インドの「民族語／国語 (national language)」としてのヒンドゥスターニー語の奨励などについては、すでによく知られている。⁴⁾ しかし、彼が自らの故郷であるグジャラートの言語や文学をどのように評価し、それらをどのように変革しようと試みたのかについては、彼自身によるまとまった記述が少ないこともあり、グジャラーティー文学史などで大まかに紹介されているものの、⁵⁾ 十分に検討されてこなかった。

筆者の考えでは、グジャラートの言語・文学に関する彼の見解を明らかにすることは、グジャラーティー文学史におけるいわゆる「ガンディー時代」（一般に 1910 年代半ばからインドが独立する 1947 年前後までを指す）についての理解を促すと同時に、ガンディーが提唱したインド全体に関わる言語政策を理解するうえでも重要である。そこから彼の描くインドの「スワラージ（自治，独立）」のあり方を考察することもできるだろう。

以下では、まず第 1 節で、植民地期のインド全体の言語状況をガンディーがどのように認識し、これをいかに変革しようとしたのかについて、その大枠を紹介する。⁶⁾ 続く第 2, 3 節では、彼が自らの母語として位置づけていたグジャラーティー語や、この言語で書かれた文学について、どのような主張を展開していたのかを分析する。資料としては、彼の著書、及び前述の『ガンディー全集』を用いており、いずれの場合も、引用にあたっては、ガンディーがもともとグジャラーティー語で執筆したものについてはグジャラーティー語版を、英語やヒンディー語で執筆したものについては英語版を用いた。⁷⁾ また、第 2, 3 節では、これとあわせて、ガンディーの試みが独立後のグジャラートにどのような影響を残したのかについても検

-
- 1) 本稿は、科学研究費補助金・基盤研究 (A) 「脱植民地化諸地域における政治と思想—日本植民地主義と西欧植民地主義の比較と国際環境」(平成 15-18 年度, 研究代表者 若林正丈) で行った研究の成果を踏まえている。
 - 2) *The Collected Works of Mahatma Gandhi*, 100 vols (New Delhi: The Publications Division, Government of India, 1958-1994) [以下, CWMG]. 英語, ヒンディー語版 (ともに全 100 巻) はインド政府から出版されている。グジャラーティー語版は、グジャラート州アムダーヴァード (アフマダーバード) 市にあるナヴァジーヴァン・トラスト (Navajivan Trust) から、*Gandhijino Akshardeb: Mahatma Gandhinam Lakhano, Bhashano, Patro vagereno Samgrah* [以下, GA] のタイトルで 1967 年から出版されており、現在までに 81 巻の刊行が終了している。なお、1998 年にインド政府は英語版・ヒンディー語版の再編作業を始め、その後、改訂版及び CD-ROM 版が出されたが、研究者の中には、改訂版には初版に比べて不備な点が多いとして、改訂版の回収を求める人々もいる。詳細については、[Suhud 2004] 参照。
 - 3) 『インドの自治』『真理の実験、あるいは自叙伝』(後述) などのガンディー自身の著書をはじめ、ガンディー関連のグジャラーティー語、ヒンディー語、英語文献を数多く出版している組織として、ナヴァジーヴァン・トラストが挙げられる。この組織は、もともとはガンディーが編集に携わっていた週刊紙『ナヴァジーヴァン (Navajivan)』(グジャラーティー語) 及び『ヤング・インディア (Young India)』(英語) を印刷するために設立された。「ナヴァ」は新しい、「ジーヴァン」は生活、人生の意。
 - 4) 言語問題に関するガンディーの言葉を集めた出版物としては、[Gandhi 1956; Prabhu 1958] などがある。また、このテーマを扱った研究のうち、最近のものには、[Lelyveld 2001; 藤井 2000] などがある。
 - 5) [Munshi 1935; Jhaveri 1978; Dave 2005, 2006] などを参照。
 - 6) 第 1, 2 節は、[Isaka 2001] で取り上げた問題関心をもとに、調査対象・資料を広げて議論を発展させたものである。

討する。最後に、再度、インド全体の言語状況についての彼の議論、特に「民族語」に関する議論と、それが政治的に脱植民地化の過程にあったインドに与えた影響について考察しながら、今後の研究の方向について若干の見通しを示したい。

1. ガーンディーの言語観

インドの言語状況についてのガーンディーの認識・評価は、南アフリカ滞在時代（1893-1915年）が終わるまでには、その大枠が形づくられていたと思われる。彼はこのころから、「自らの言語／母語」に誇りをもつことの重要性を説き、インドにおける英語使用の現状を鋭く批判するようになる。1909年にグジャラティー語で執筆した『インドの自治（*Hind Swaraj*）』では、第18章「教育」の中で、英語教育を受け入れた「私たち」がインドやインドの人々を「奴隷化」したのであり、こうした「私たち」が解放されれば人々も解放されると述べている [Gandhi 1995b: 64-66, 1995c: 80-81; ガーンディー 2001: 127-128, 130]。ガーンディーは、インド人はまず自らの母語やヒンディー語（後にヒンディー語に代えてヒンドゥスターニー語という言葉を中心に用いるようになる。後述）を学ぶべきであると主張し、⁸⁾ 南アフリカにおける言論活動や教育実践の中でも、積極的にインド諸語を使用していた [Gandhi 1994: 104, 144, 246, 269-270, 1995a: 95, 131, 220, 242-243; ガーンディー 2005a: 159, 213-214, 2005b: 86, 119-121]。その態度はときには頑なともいえるほどであり、国民会議派の指導者ゴーカーレーが1912年に南アフリカを訪問した際にも、インド人のみの集まりでは英語ではなくマラーティー語で演説をすることを彼に強く促し、承諾させている [Gandhi 1994: 269-270, 1995a: 242-243; ガーンディー 2005b: 120-121]。ただし、その一方で、ガーンディーは英語の使用を部分的には認めていた。たとえば前述の『インドの自治』の中では、すでに英語教育を受けた者に対して、その成果を必要ときに有効に用いるように呼びかけており、イギリス人とのやりとりや、インド人でも英語以外の言葉では意思疎通ができない人々との間では、英語を使用することを認めている [Gandhi 1995b: 65, 1995c: 80-81; ガーンディー 2001: 128]。

1915年にインドに帰国したガーンディーは、言語に関するこうした方針をさらに明確化

7) グジャラティー語版と英語版とでは、言葉の意味合いが異なっていたり、ときには内容自体に差異がある場合もある。なお、本稿では、ガーンディーの言葉を紹介する際に、彼が用いたグジャラティー語の単語を示す必要がある場合には、ダイアクリティカルマークを付したローマ字で表記する。その他の箇所では、グジャラティー語の人名、組織名、本の題名などに言及する際には、英語文献中で一般に用いられているローマ字表記を採用し、ダイアクリティカルマークを付さない。

8) ガーンディーは『インドの自治』の中で、教養あるインド人の場合には、全ての者がヒンディー語を知るべきであると主張している。さらに、ヒンドゥーならばサンスクリット語を、ムスリムならばアラビア語を、パールシーならばペルシア語を知るべきであるとも述べている。また、ヒンディー語の表記にあたっては、ウルドゥー文字とデーヴァナーガリー文字のいずれをも使用できるとしている [Gandhi 1995b: 66, 1995c: 81; ガーンディー 2001: 129-130]。

させていく。帰国直後に催されたグジャラート人の集会では、ほとんどの演説が英語で行われている中で、あえてグジャラーティー語で話すことで参加者の間に強い印象を残している [Gandhi 1995d: 358, 1992: 436; ガーンディー 2000b: 212; Yagnik, I. 1967: 183; Munshi 1940: 2]。この背景には、当時、インド人エリートの間では、英語で高等教育を受け、言論・執筆活動においても英語を用いる者が少なくなかったという社会状況があった。別稿 [Isaka 2002] で示したように、こうしたエリートたちは、英語を使用する一方で、西洋の言語・文学観の影響を受けながら、それぞれの地域の言語の標準語化や改革を試みたり、地域言語での新しい文学のあり方を模索する動きも見せている。しかし 20 世紀初めのグジャラートにおいては、そうした動きは、英語教育や英語の使用を否定する議論には発展していなかった。

インド帰国後のガーンディーは、英語教育の影響を強く受けたエリートたちを前に、英語の使用を批判するばかりでなく、グジャラーティー語の中で英単語を多用することに対しても批判を展開している。後に彼の秘書となるマハーデーヴ・デーサーイー (Mahadev Desai, 1892-1942) は、ガーンディーと知り合ってから間もないころに、議論の中で英語の単語や文章を多用していることを彼に指摘されている。ガーンディーはこのとき、デーサーイーがそのような話し方をするならば、デーサーイーの母親は息子の豊富な学識を認めはするだろうが、彼の言葉をまったく理解できないであろうと述べ、教育を受けたグジャラートの人々がグジャラーティー語をおろそかにすることを批判した [Desai, N. 1995: 57]。当然のことながら、こうしたガーンディーの姿勢に反発する知識人も少なくなかったのだが、⁹⁾ ガーンディーは言語・文学に関する彼の試みを、粘り強く続けている。彼はその過程で、彼の他の試みの場合と同様に、自らの出身地でありもっとも重要な支持基盤でもあったグジャラートに大きな期待を寄せることになる (後述)。

ガーンディーは様々な機会を利用して、英語に代えて母語やヒンディー語／ヒンドゥスターニー語を使用することを訴えているのだが、1917 年にブローチ (現バルーチ) で開かれた第 2 回グジャラート教育会議の議長演説は、言語に関する彼の考えを多岐にわたって詳細に表しており [GA 14: 14-35; CWMG XIV: 8-36]、彼の主張を理解するうえで重要である。以下に、ここに示されたガーンディーの主張の要点を挙げておく。

彼はまず、教育活動に用いる言語について、英語ではなく母語を使用することを強く訴えている。当時、ガーンディーの育ったインド西部の教育制度では、一般に初等教育から中等教育の途中までは現地語 (グジャラートであればグジャラーティー語) で行われ、高等学校の 4 年次以降は英語による授業が行われていた [Government of Bombay 1958: 160]。グジャラーティー語で書かれたガーンディーの自叙伝 (『真理の実験、あるいは自叙伝』, 1925-29 年¹⁰⁾)

9) グジャラート内での知識人の反応については、[Mehta 2005: 295, 297] 参照。

で触れられているように、彼自身も、高等学校4年生のときに授業が英語で行われるようになり、苦労した経験をもつ [Gandhi 1995d: 14, 1992: 18; ガーンディー 2000a: 50]. 英語ではなく母語を使用すべきであるとする根拠として、ガーンディーは、外国語による教育は効率が悪く子供たちへの負担も大きいという、彼らの創造性を退化させ、「単なる模倣者」を生み出すと主張している [GA 14: 19-20; CWMG XIV: 14-15]. また、彼の見解では、英語による教育は、教育を受けた人々と「民衆」との間の溝を深めるものであった [GA 14: 20; CWMG XIV: 16]. ただし、彼はここでも、一部の人々に対して英語の習得を認める姿勢も見せており、英語文献を学んで得た成果を人々に提供したい者や、支配者とのやりとりにおいて英語を使用する者、あるいは経済的な利益のために英語の知識を要する者などについては、選択科目として英語を学ぶことを促している [GA 14: 22; CWMG XIV: 19].¹¹⁾

以上のように教育活動における英語の使用を批判したうえで、ガーンディーは同じ演説の中で、どの言語を「民族語（グジャラーティー語の原文では *rāṣṭriya bhāṣā*）」とすべきかという問いを取り上げている。彼によれば、民族語となる言語は、(1) 政府役人にとって習得が容易であり、(2) インドの宗教・経済・政治交流のための媒体となりうるものであり、(3) インドの多くの人々が話し、(4) インド人にとって習得が容易である、という条件を満たすものが望ましいとされた。また彼は、これらに加えて、(5) その言語を選ぶ際には、一時的な状況は考慮すべきではない、という条件も加えている [GA 14: 25; CWMG XIV: 23]. ガーンディーはそのような言語はヒンディー語であると述べ、続いて「ヒンディー語」とは何かを定義している。それによれば、ヒンディー語は北インドのヒンドゥーやムスリムが話す言葉であり、デーヴァナーガリー文字あるいはウルドゥー文字で書かれるものであった。彼は、デーヴァナーガリー文字で表されるヒンディー語と、ウルドゥー文字で表されるウルドゥー語とを、ふたつの異なる言語であるとする見方¹²⁾ に対して、強い異議を唱えている。彼によれば、教育を受けたヒンドゥーがヒンディー語を「サンスクリット語化」し、同じく上層のムスリム¹³⁾ がウルドゥー語を「ペルシア語化」する現象は見られるものの、こうしたエリートの言語は民衆にとってはなじみのないものであり、本来のヒンディー語とウルドゥー語は、文字の違いを除けば同一の言語であった [GA 14: 26; CWMG XIV: 24]. なお、ガーンディーはここでは「ヒンディー語」という言葉を用いているが、1920 年ごろからは、「ヒンディー語」に代え

10) 『真理の実験、あるいは自叙伝』はまず、1925-29 年に『ナヴァジャージュヴァン』紙に連載され、これをまとめたものが 1927, 29 年にそれぞれ第 1 巻、第 2 巻として出版された。改訂版（1 巻本）は 1940 年に出版されている。

11) ただし、ガーンディーは同時に、こうした人々の場合にも、教育に用いる言語は母語とすべきことも主張している。

12) ヒンディー語とウルドゥー語とをそれぞれヒンドゥー、ムスリムと結びつけ、両者を対立的にとらえる見方が発展した過程については、[King, C. R. 1994] 参照。

13) ここでは「ラクナウ（北インドの都市名）のムスリム」という表現が用いられている [GA 14: 26; CWMG XIV: 24].

て「ヒンドゥスターニー語」という言葉を用いている。これは、「ヒンディー語」をデーヴァナーガリー文字や「サンスクリット語化」した形態とのみ結びつける見方に対して、自らが提唱する「民族語」としての「ヒンディー語」がこれとは異なることを明らかにするためであった。

この「民族語」を書くための文字に関して、ガンディーは、将来、ヒンドゥーとムスリムとの間の不信感が消滅した折には、より人々の間で影響力をもつ文字、すなわちデーヴァナーガリー文字が「民族文字（グジャラーティー語の原文では *rāṣṭriya lipi*）」になると述べたうえで、それまでの間はウルドゥー文字の使用も認めるべきであるとしている [GA 14: 27; CWMG XIV: 25]。実は、ガンディーはこのグジャラート教育会議とは別の機会に、デーヴァナーガリー文字をヒンディー語のみならず、インドの全ての言語について用いることまで提案している [CWMG XXXIII: 120-121, XXXIV: 168-169, LXIII: 224, LXV: 35, LXX: 46-47]。¹⁴⁾ 彼によれば、全ての言語をデーヴァナーガリー文字で表記することは、人々が異なる言語を習得するのを容易にし、地域間の交流を促すことを意味した。さらに、大多数の民衆は識字能力がないというインドの状況を鑑みても、彼らにとってはどの文字を学ぶのも同じことであるとの主張（したがってそれぞれの言語固有の文字にこだわる必要はない）や、言語ごとに異なる複数の文字を彼らに習得させることはできないとの主張も展開している [CWMG LXIII: 224, LXV: 35, LXX: 46-47]。ただし、実際には、インドの全ての言語をデーヴァナーガリー文字で表記するという彼の提案を支持する声は少なかったと思われる。このことはガンディーも認識しており、彼自身が編集に関わっていたグジャラーティー語紙の『ナヴァジーヴァン』に対して、デーヴァナーガリー文字で表記すべきではないかとの意見が寄せられた際には、文字を変えれば読者数が減るとの見通しから、その意見自体は尊重しつつも文字の変更を拒否している [GA 34: 59; CWMG XXXIV: 61]。

また、ガンディーはこのように民族語の普及を主張する際に、民族語はあくまで異なる地域間のコミュニケーションのために用いられるものであり、地方語に取って代わることはないことをしばしば強調している。¹⁵⁾ これは、非ヒンディー語圏、特に、アーリヤ系言語のヒンディー／ヒンドゥスターニー語とは文法も文字も大きく異なる南インドのドラヴィダ系言語圏からの反発を意識したものであった。ガンディーはさらに、ドラヴィダ系言語もサンスクリット語の単語を多く含んでいる点でサンスクリット語の「娘」であると主張し [CWMG LX: 453]、また、ヒンディー／ヒンドゥスターニー語は習得が容易な言語であるとも述べている [GA 14: 25-26; CWMG XIV: 23-24, LX: 451]。しかし、こうした彼の見解は、マドラス

14) ガンディーは文字の統一に関連して、ヨーロッパでは異なる言語に同じ文字が用いられていることにも注目している。

15) たとえば、[CWMG XXXIV: 169, LX: 454] などを参照。

州において、すでに独立前から激しい反ヒンディー語運動が起こっていたことからもうかがえるように、¹⁶⁾ ヒンディー語支配の可能性に対するドラヴィダ系言語圏からの懸念や反発を消すことはできなかった。

1917年のグジャラート教育会議におけるガーンディーの演説では、以上のような諸点のほかに、言語分布に基づいて州を再編する必要性についても簡単に触れられてる [GA 14: 25; CWMG XIV: 22]。当時の英領インドにおいては、管区／州の境界は言語分布に対応しておらず、たとえばボンベイ管区には、グジャラーティー語、マラーティー語、カンナダ語、スインディー語が話される地域が含まれていた。こうした状況に対して、当時すでに南インドのテルグ語地域のように、特定の言語を話す地域を新たな州として独立させようとする動きが現れており、ガーンディーは演説の中で、こうした運動に対する理解を示している [GA 14: 25; CWMG XIV: 22]。この言語分布に基づき州区分を再編するという構想、すなわち「言語州」構想は、1920年のインド国民会議派の年次大会（ナーグプル大会）において、ガーンディーの指導下に会議派組織が再編される際に採り入れられ、このとき、言語分布の境界に対応した会議派独自の「州」ごとに州委員会が設置されている [Report of the Thirty-fifth Session of the Indian National Congress 1920: 109-110]。ガーンディーは話者人口の多い言語に関しては、言語州を設けることでその地位を保障する一方で、次節で見るように、言語州内に残されたいわゆる「少数派」言語や「未発達で、文字のない方言」については、「多数派」言語の支配下におくこともやむをえないと考えていた。独立前に会議派が採り入れたこの「言語州」の概念は、独立後の1950年代には、インド政府による大幅な州再編をもたらしている。¹⁷⁾

以上、1917年の演説に基づいて、インド全体の言語状況に対するガーンディーの認識や、その状況を変革するにあたっての彼の基本方針を明らかにした。ガーンディーはその後も、状況に応じて若干の変更を加えながらも、これらの方針を政治・言論・教育活動を通じて繰り返し強調している。

2. グジャラーティー語の改革

次に、ガーンディーがインドの地方語のひとつであり、自らの母語であるグジャラーティー語について、どのような主張を展開していたのかを検討する。

1915年に南アフリカからインドへ帰国したガーンディーは、グジャラートの中心都市アムダーヴァード（アフマダーバード）市郊外にアーシュラム（道場）を建設し、ここで共同生活を始める。また、1918年以降、複数の代表的なサティヤグラハ（真理の堅持の意、非暴力運動を指

16) この運動は、1937年にマドラス州に成立した会議派州政府がヒンディー語教育の導入をはかったことをきっかけとして起こった。詳細については、[Ramaswamy 1997] 参照。

17) 詳細については、[King, R. D. 1998] 参照。

す)をグジャラートで組織するなど、この地域との関わりを運動や「実験」において意識的に用いていく。彼は『真理の実験、あるいは自叙伝』の中でも、自分はグジャラート人であるため、グジャラーティー語を通じてこそインドに最大の奉仕ができると考えたことと記している [Gandhi 1995d: 378, 1992: 461; ガーンディー 2000b: 246]。¹⁸⁾ また、後年、彼の発行するグジャラーティー語紙『ハリジャンバンドウ』¹⁹⁾においても、なぜグジャラーティー語ではなくヒンドウスターニー語で呼びかけないのか、との読者の批判に答えて、以下のように述べている。

私は自分がグジャラート人であるので他の地方の人とは違うのだとは、一度も考えたことがありません。私はいつも自分をインド人として考え、そのように述べてきました。(中略)しかしながら、自分の能力を活用することを考えたり、その能力を母なるインド²⁰⁾に捧げようとするときには、自分の出身を意識せざるをえません。グジャラーティー語が母語であり、グジャラートと多くの関係をもっているのですから、²¹⁾私はグジャラートとグジャラーティー語を通じてこそ母なるインドにもっとも奉仕できるでしょう。この考えに基づいて、私は自分の住処をグジャラートに決めました。²²⁾でも私はポールバンダルやラージコートは選びませんでした。どちらの場所からも招待されていましたし、便宜も与えられていたのですが、私はもはやポールバンダルやラージコートにも、自分のカーストにも属さなくなっていたのです。(Harijanbandhu, 1940 年 7 月 27 日) [GA 72: 305; CWMG LXXII: 310]

このように、ガーンディーは自らの地域アイデンティティとして、彼の生まれ故郷のポールバンダル藩王国や、この藩王国が位置するカーティヤード半島ではなく、それらを包摂した「グジャラート」を用いている。また、自らの母語はグジャラーティー語であるとして、言論・出版活動の多くをグジャラーティー語で行うとともに、グジャラーティー語の文芸サークルに参加したり、²³⁾グジャラート知識人層と個人的な交流を深めていく。こうした中で、彼はグジャラートの言語・文学に関する自らの見解を明らかにしていき、それらの見解は、言論・

18) ただし、ガーンディーは、母語であるグジャラーティー語への愛着を強調する一方で、自らのグジャラーティー語能力やグジャラーティー文学に関する知識が限られていることにたびたび言及している [Munshi 1935: Foreword, v; Desai, N. 1995: 268; GA 61: 438; CWMG LXI: 448-449].

19) ガーンディーが不可触民差別の撤廃を呼びかけるために創刊したグジャラーティー語の週刊紙、「ハリジャン」は神の子の意で、ガーンディーが不可触民に代わる呼称として提唱した言葉。「バンドウ」は兄弟の意。グジャラーティー語版とあわせて、英語版『ハリジャン (Harijan)』、ヒンディー語版『ハリジャンセーヴァク (Harijansevak)』も発行された。

20) グジャラーティー語版では Hindmātā, 英語版では motherland の言葉が用いられている。

21) 英語版ではこの箇所は「グジャラート人をよりよく知っているの」と書かれている。

22) 英語版ではこの箇所に「南アフリカから戻ったときに」という説明が補足されている。

23) たとえば彼は、1916 年 4 月に、当時のグジャラートの代表的な文芸協会であるグジャラート言語協会 (Gujarat Vernacular Society, 1848 年設立) 宛に、入会を希望する旨の書簡と会費を送っている [GA 13: 247; CWMG XIII: 267]. 協会は彼を名誉終身会員とし、会費を返却している。

教育活動を通じて、グジャラート知識人層の間に広く知られていくことになる。

まずガーンディーは、グジャラーティー語という言語自体について、本来は豊かな言語であると主張している。彼は、19世紀後半にヨーロッパ人宣教師テイラー（Joseph Van S. Taylor）が記した『グジャラーティー語文法』（1867年）[Taylor 1867]の言葉をたびたび引用しながら、サンスクリット語の「娘」であるグジャラーティー語は貧困な言語ではないと主張している [GA 14: 17-18; CWMG XIV: 12-13; GA 63: 405; CWMG LXIII: 419]。また、15世紀以降のグジャラートにおける数々の「詩人」たちや、グジャラート近代文学の代表的詩人・作家たちの名前に言及しながら、グジャラーティー語の成長には限りがないと主張している [GA 9: 517-518; CWMG IX: 459; GA 14: 24; CWMG XIV: 21]。さらに、グジャラーティー語の発展の根拠として、その話者人口にヒンドゥー、ムスリム、パールシーという3つのコミュニティが含まれることにも触れている [GA 9: 517-518; CWMG IX: 459]。

このようにグジャラーティー語の本来の「豊かさ」を強調する一方で、ガーンディーはこの言語の現状に関して批判的な見解を示している。たとえば、グジャラーティー語の綴りの不統一という問題をたびたび取り上げ、この「無秩序状態」は他のどの言語にも例がないとして、単語の綴りが確定されていない言語を話す人々は「野蛮」であるといわざるをえない、と述べている [GA 71: 187; CWMG LXXI: 176]。彼の影響下に、1929年にはグジャラート・ヴィドヤープীト（Gujarat Vidyapith, 1920年にガーンディーの教育思想にそって設立された教育機関）²⁴⁾ から『綴り辞典』が刊行される。²⁵⁾ 彼はその出版に寄せて、『ナヴァジーヴァン』紙の中で、「単語の綴りが確定していない言語は、鼻のない人間と同じだ」と述べ、人々にこれからはこの辞典を参照するようにと呼びかけている [GA 40: 204; CWMG XL: 213]。また彼は、グジャラートの教育機関がこの辞典に記された綴り方を広めることを期待し、自らも私信の中で知人たちにこの辞典を参照するように勧めている [GA 40: 316, 324; CWMG XL: 335, 345; GA 45: 9; CWMG XLV: 9]。インド独立後、この『綴り辞典』で示された綴りは政府や大学によって認められ、グジャラートに広く普及することになる [Trivedi 1967: 191; Modi 1991: 95]。

またガーンディーは、上記のようにグジャラーティー語話者人口の多様性をグジャラーティー語の豊かさとして挙げながらも、同時にパールシー²⁶⁾ やムスリムの用いるグジャラーティー語に対して強い批判を展開している [Munshi 1935: Foreword, vi]。特に「パールシー・グジャラーティー語」に対する評価は厳しく、彼らがグジャラーティー語を「殺している」と

24) この教育機関においては、授業はグジャラーティー語で行われ、ヒンディー／ヒンドゥスターニー語が必修科目として教えられた。ガーンディーの教育思想については、[Kumarappa 1951, 1953; Gandhi 1962a, 1962b; 弘中ほか 1990]などを参照。

25) 1931年には、綴りのほかに、それぞれの言葉の意味を加えた第2版が出版されている [Sarth Gujarati Jodnikosh 2003: 22]。

26) 8世紀から10世紀ごろ（諸説あり）にイランからインドへ移住したといわれるゾロアスター教徒。植民地期のパールシーについては、[井坂 2006] 参照。

の表現まで用いながら、彼らの独特の発音や綴り方を批判している [GA 9: 518; CWMG IX: 460; GA 19: 450; CWMG XIX: 507].²⁷⁾ ガーンディーは、パールシーの用いるこうしたグジャラーティー語が「真の (kharī)」²⁸⁾ グジャラーティー語として認められない理由について、以下のように述べている。

グジャラートに住む多数の教育を受けた人々が話し、書いているグジャラーティー語が真のグジャラーティー語です。グジャラーティー語はサンスクリット語の娘なのですから、サンスクリット語に基づかなければならないというのは、疑問の余地のないことです。(Navajivan, 1921 年 4 月 3 日) [GA 19: 450; CWMG XIX: 507]

以上のように、綴りの不統一の問題にせよ、パールシーの用いるグジャラーティー語に対する批判にせよ、ガーンディーは、グジャラーティー語内部の多様性に留意しながらも、基本的には地域やコミュニティを超えて全ての話者が共有しうる言語＝「真の」言語が存在する、あるいは存在すべきである、との立場にたっていた。こうしたガーンディーの見解には、英語教育や西洋文学の影響を受けた上位カースト・ヒンドゥーの知識人層が中心となっており、19 世紀後半からなされてきた「標準」語や「純粋な」言語とは何かをめぐる議論の影響が明らかに反映されている。この 19 世紀の議論においては、上位カースト・ヒンドゥー知識人の主導権のもとに、グジャラート北部で話される言語を基礎にした「標準」語が規定されており、これとは発音や綴りの異なる各地の「方言」やパールシー・グジャラーティー語は、しばしば批判の対象となっている。²⁹⁾ さらに 19 世紀末には、彼らの間から、ペルシア語や英語などの「外来語」の使用を批判し、より積極的にサンスクリット語の語彙を用いることを主張する人々も現れ、「サンスクリット語化」されたグジャラーティー語を用いた文学作品が目立つようになる（いわゆる「パンディット時代」）。ガーンディーがヨーロッパ人の書いた文法書を用いて、グジャラーティー語をサンスクリット語とのつながりという点から賞賛したり、グジャラーティー語がサンスクリット語に基づいていることを強調するところには、こうした 19 世紀のグジャラート知識人層の言語観・言語改革の影響を見て取ることができる。

ただし、ガーンディーの提示するグジャラーティー語改革のあり方は、それまでの知識人層による標準語化の試みとは、その手段や意味づけにおいて差異が見られる。すなわち、19 世紀後半のグジャラーティー語の標準語化の議論が、ある特定の地域・コミュニティ・階層の用

27) 「パールシー・グジャラーティー語」と呼ばれる言語の特徴としては、インドへ移住したゾロアスター教徒が最初に定住したといわれるグジャラート南部の「方言」に近いことや、語彙にペルシア語、アラビア語、英語などの「外来語」を多く含むことなどが一般に指摘されている [Grierson 1908: 392; Desai, B. N. 1918].

28) kharī は、真の、純粋な、正しい、の意。英語版では true と訳されている。

29) 詳細については、[Isaka 2002; 井坂 2003] 参照。

いる言語を標準語と特定し、それを他の言語（いまや「方言」と位置づけられる）を用いる人々の間に、行政・教育などを通じていわば「上から」普及させることを想定していたのに対して、ガーンディーが目指したのは、既存の知識人層を中心としながらも、異なる地域・コミュニティ・階層の人々が参加、協力するかたちでひとつの「真の」言語が発展していき、それを広範な人々が自発的に身につけていくような状態であった。彼にとっては、言語の統一化は、標準語を非標準語を話す人々に強制する過程ではなく、多様な人々が自発的に言語の発展、普及に奉仕する中で、いわば自然と達成されるものであった。たとえば彼は、グジャラーティー語の話者人口にヒンドゥー、ムスリム、パールシーといった異なるコミュニティが含まれることに言及した際に、この言語のために「奉仕」することは彼ら全てにとっての「義務」であると述べ、協力を呼びかけている [GA 19: 450; CWMG XIX: 508]。彼にとっては、こうして「全ての人々」が母語の発展のために奉仕することこそが、まさにインドを「奴隷状態」から解放するための必要条件であった。

しかしながら、ガーンディーが既存の知識人層の指導的役割を認めていたこともあり、現実には彼のグジャラーティー語観やそれに基づく言論活動は、19世紀後半以降、上位カースト・ヒンドゥーの知識人層が中心となって進められた「上からの」標準語化の流れを後押しすることになる。ガーンディーの影響下で組織された教育活動においては、一方では「母語」の使用が強調されながらも、一方では「方言」とされた言語を話す人々——たとえば、標準グジャラーティー語とは大きく異なるビーリー語やダーンギー語を話すグジャラート南部のアーディヴァーシー（先住民、「トライブ」）——に対しては、彼らの「母語」ではないグジャラーティー語が強いられているという、矛盾した状況が見られる [Yagnik, A. 1998: 60]。「母語」を重視し、教育を各地の言語で行うことを主張していたガーンディーだが、「未発達で、文字のない方言」については、「犠牲」となることもやむをえないとの考えをほのめかしている [CWMG XXVIII: 121]。

こうしてガーンディーの時代に強化された「上からの」標準語化の流れは、独立後のグジャラートの言語政策にも影響を残すことになる。インドは1950年代から、前述の「言語州」の概念に基づいて大規模な州の再編を行うが、その流れの中で、1960年には、それまでのボンベイ州³⁰⁾がマラーティー語地域とグジャラーティー語地域とに分割され、後者がグジャラート州として新たに成立する。この結果、この地域におけるグジャラーティー語の地位はそれま

30) 独立以降、藩王国領がインドに統合されると、このうちのグジャラーティー語、マラーティー語地域はボンベイ州に段階的に統合される。また、州間での領土の割譲も行われ、ボンベイ州に含まれていたカンナダ語地域はマイソール州（後のカルナータカ州）に、マディヤ・プラデーシュ州に含まれていたマラーティー語地域はボンベイ州に併合される。こうした再編の結果、1956年までに、ボンベイ州は主にマラーティー語・グジャラーティー語地域からなる「二言語州」となるが、それぞれの地域からの分離要求の動きを受けて、1960年にマハーラーシュトラ州とグジャラート州とに分割される。

で以上に強化されることとなる。州公用語にはグジャラーティー語とインドの連邦公用語であるヒンディー語が選ばれ、英語教育に向ける政府の関心は明らかに低下していく [Kothari 2006: 83]。この背景には、複数の言語集団が含まれていたボンベイ州のときは異なり、グジャラーティー語地域として成立したグジャラート州では、州内で公的な目的のために英語を使用する必要性が低下したと考えられるようになったことが挙げられるだろう。また、この地方が反英運動の時代にガンディーの影響をとりわけ強く受けていたことも、州政府内部や世論において英語教育に消極的な傾向を強めたものと思われる。³¹⁾

一方、州内で話される標準グジャラーティー語以外の言語、すなわち、南グジャラートのビーリー語、ダーンギー語や、カッチ地方のカッチー語などを話す人々は、グジャラートという「言語州」の成立によって、いまや公式にグジャラーティー語支配のもとにおかれることになった。グジャラート州政府が、こうした「少数派」言語の話者に配慮し、言語学者らや現地からの提案をもとに、彼らが集住する地域で彼ら自身の言語による初等教育を部分的に導入することを検討しはじめるのは、ようやく1990年代半ばになってからのことであった。³²⁾

3. グジャラーティー文学の改革

ガンディーのグジャラーティー文学に関する考察として、ここではまず1936年のグジャラーティー文学会議 (Gujarati Sahitya Parishad, 1905年設立) 第12回大会における彼の議長演説 (*Harijanbandhu*, 1936年11月22日に掲載) を取り上げる。³³⁾ 彼はこの中で、誰のために我々は文学を創作するのか、という大きな問いを投げかけている。彼は、「井戸で、皮のバケツ (kos) を引き上げている男性 (kosiyō)」がどのような言葉を用いているのかに触れ、その男性が、罵り言葉であるとは知らずにそうした言葉を口にしてしている状況を紹介している。ガンディーは、この男性の状況を、文学者の言葉の力によって改めることを希望していた。しかし、彼自身の村での経験によれば、現状では村の民衆が理解できるような適切な文学作品を見つけることは困難であった。彼は文学者たちに向かい、村での状況を考えたとき、「あなた方の文学は役に立たない」と述べている [GA 63: 396-404; CWMG LXIII: 407-417]。³⁴⁾

31) グジャラート州における英語教育をめぐる議論については、[Kothari 2006: 83] 参照。ただし、近年では海外へ移住する人々の数が増えたことや、経済改革の進展に伴う経済・社会活動の国際化の流れの中で、英語に対する需要が増大し、英語教育に対するグジャラート州の人々の意識も大きく変わりつつある。

32) ヨーゲンドラ・ヴァース氏 (Yogendra Vyas, 言語学者、グジャラート州のアーディヴァーシーの言語を研究) へのインタビュー (2006年3月22日) より。

33) ガンディーは1920年にもグジャラーティー文学会議において類似した内容の演説を行っている [GA 17: 287-290; CWMG XVII: 301-303]。

34) この演説は、1936年11月22日付の『ハリジャンバンドゥ』紙にグジャラーティー語版が掲載され、1936年11月14日付の『ハリジャン』紙に英語版が掲載されている。GAは前者の文書を収録しているが、CWMGは前者の文書の英訳と後者の文書とを混合させたものを収録している。ここではGAに収録されたグジャラーティー語版のほうがグジャラーティー語で行われた演説の原文に近いと想定し、こちらを参照している。

こうしたグジャラーティー文学の現状に対する批判は、彼が当時のグジャラートの代表的文学者のひとりである K. M. ムンシー (Kanaiyalal Maneklal Munshi, 1887-1971) の著書『グジャラートとその文学』(1935 年) に寄せた前書きの中でも展開されている。ここでガーンディーは知識人に対して、民衆と「我々」の言葉の溝を指摘し、「民衆の言葉はいまだに明確なかたちをとっていない」ため、ムンシーのような知識人は民衆のもとへ赴き、彼らの考えを知り、その考えに「表現を与える」ように促している [Munshi 1935: Foreword, v-vi]。ここからもうかがえるように、ガーンディーが提唱していたのは、民衆の言葉をそのままグジャラーティー文学の中に取り入れることや、民衆自身の主体的な創作活動を促すことではなかった。彼は言語の場合と同様に、文学の発展においても知識人層の指導的役割を認めており、知識人層が民衆の考えに適切なグジャラーティー語の言葉を与え、民衆が理解し親しめる文学をつくり出すことを望んでいた。前述のように、ガーンディーはこうした文学を通じて、民衆の話す言葉も自然と感化されることを期待しており、その意味では彼の提唱する「民衆のための文学」は、「上からの」啓蒙・教化という性格を有していたといえる。実はこうした特徴は、ガーンディーの教育論や社会改革運動、経済思想にも広く見られ、ガーンディーの考えるインド社会像を理解するうえでも重要であるのだが、これについては別の機会に検討したい。

なお、同じ前書きの中で、ガーンディーはパールシー作家のグジャラーティー語文学に対する批判も行っている。彼はパールシー・グジャラーティー語で書かれた「扇情的スタイル」の小説や物語に言及しながら、こうした文学は「怠惰な時間をつぶすために」存在していると断定している [Munshi 1935: Foreword, vi]。この批判の背景には、19 世紀後半以降、ボンベイをはじめとする都市部で、多数の娯楽小説・物語が流通しており、それらの執筆・出版においてとりわけパールシーが活躍していたことが挙げられる。都市住民の娯楽を目的として、しかも「真の」グジャラーティー語以外の言葉で書かれた文学は、ガーンディーの考える文学のあるべき姿とは対極をなすものであった。ガーンディーは、グジャラーティー語話者人口の多様性を認めつつも、全ての人々が共有しうる「ひとつの言語」を想定していたのと同様に、文学についても、地域・コミュニティ・階層を超えて広く共有されうる文学のあり方を主張していた。

ガーンディーの提唱した文学観は、植民地統治下で教育を受け、英語文学、サンスクリット文学などの影響を反映させた文学を発展させてきた上位カースト・ヒンドゥーを中心とする知識人層の間では、関心は寄せられたものの、それまでの潮流を大きく変えるには至らなかった。前述のように、ガーンディーが登場するすぐ前の時代には、「サンスクリット語化」されたグジャラーティー語を用いる文学者が台頭していたが、ガーンディーは彼らとは対照的に平易なグジャラーティー語を用いており、知識人層の中からこれに倣って平易な言葉を用いた文学を志す人々も現れる。また、農村や民衆を描いた文学作品が登場したり、ジャヴェールチャンド・メーガーニー (Jhaverchand Meghani, 1896-1947) などによる民衆の歌や語りを収集す

る試みも行われており、こうした動きの中にガンディーの影響を見ることも可能である。しかしながら、ガンディーがあるべき文学のかたちを発展、普及させるにあたって、上位カースト・ヒンドゥーを中心とする既存の知識人層に指導的役割を期待していたことから、全体としては、それまでの知識人層による「上からの」文学観・文学評価が、この「ガンディー時代」においても継承、強化されている。グジャラーティー文学会議に代表されるような上位カースト・ヒンドゥーを中心とする文芸サークルは、パンディト時代からこの時代を経て独立後に至るまで、グジャラートの文学活動において影響力を維持し続けることになる。

ただし、独立後のグジャラートでは、ガンディーの提唱していたものとは異なる方向から、民衆の考えに「表現を与える」試みも現れるようになる。たとえば1980年代以降、グジャラートではダリト（「ダリト」は抑圧された人々の意。いわゆる「不可触民」を指す）の作家によって、ダリトのおかれた状況や彼らの体験について書かれた文学作品（「ダリト文学」）が次々と登場する。³⁵⁾ それらの文学作品の中には、グジャラート、あるいはインドの文学界で高い評価を受けたものや、英語に翻訳されて大手出版社から出版され、インドの他地域やインド以外の地域にも知られるようになったものも含まれる。³⁶⁾ こうした近年のグジャラートにおける「下からの」文学の成長が、植民地期から続く「上からの」文学観・文学評価にどのような影響を及ぼしていくのか、今後の進展が注目される。

結びにかえてーガンディーとインドの言語問題

異なる地域・コミュニティ・階層の人々が互いに協力しながら、彼らが共有できるグジャラーティー語・文学を発展、普及させていくというガンディーの主張は、第1節で紹介したようなインドの「民族語」に関する彼の議論の基盤ともなっていると思われる。しかし、グジャラートの場合以上に、インドにおいて地域・コミュニティ・階層を超えて人々が自発的に共有しうる「ひとつの言語」を発展させていくことは困難であった。

むしろこうしたガンディーの主張は、彼の意図とは関わりなしに、北インドのヒンドゥー知識人層のうち、ウルドゥー語、ウルドゥー文字を含まないかたちで、いわば排他的に「ヒンディー語」の優位を主張する人々の政治的影響力を強めていったと思われる。その背景には、グジャラートの場合と同様に、ガンディーが民族語を発展させ、普及させるにあたっても、既存のインド知識人層の指導的役割を認め、彼らの組織や運動と提携しながら進めようとしたことがあるだろう。たとえば彼は、ヒンディー文学会議（Hindi Sahitya Sammelan, 1910年設立）に加わり、この組織と協力しながら、民族語としてのヒンドゥスターニー語の普及を試みている。³⁷⁾ しかしヒンディー文学会議の中では、反英・独立運動の高まりやヒンドゥー・ムス

35) グジャラートにおけるダリト文学については、[Kothari 2001] 参照。

36) 近年、英訳・出版されたグジャラートのダリト文学作品としては、[Macwan 2004] がある。

リム間のコミューナル対立を背景に、民族語はデーヴァナーガリー文字で書かれたヒンディー語であるとの主張が次第に影響力を確立していく。ガーンディーは、一時期はこの組織で年次大会の議長まで務めたにもかかわらず、1945年、見解の相違を理由に組織から脱会する。³⁷⁾

デーヴァナーガリー文字で書かれたヒンディー語を民族語とする考えは、さらに独立後のインドの公用語政策へとつながっていく。インド憲法を制定するために設置された制憲議会では、連邦公用語の制定をめぐる激しい議論が繰り広げられたが、そこではインド・パキスタン分離独立の影響のもとに「ヒンディー語派」の勢力が台頭し、ヒンドゥスターニー語を公用語とする選択肢は退けられていく。³⁸⁾ 1950年に施行された憲法では、第343条において、インドの連邦公用語はデーヴァナーガリー文字で表されたヒンディー語であると明記された。⁴⁰⁾ ただし、同じ第343条には、憲法施行後15年間は、連邦レベルの公的目的のために英語が用いられることも記されている。この英語存続の背景には、連邦公用語をヒンディー語のみに絞ることに対する非ヒンディー語圏、とりわけ南インドからの強い反発があった。制憲議会においては、非ヒンディー語圏の代表によって、ヒンディー語の公用語化は特定の地域の人々にのみ有利に働くとして、むしろどの地域の言語でもないサンスクリット語を推す声まで出されたほどである。⁴¹⁾ こうした対立の中で、最終的な妥協案として成立したのが、期限つきで英語の使用を認めるという選択であった。この連邦公用語としてヒンディー語・英語を併用するという政策は、その後、当初の期限が過ぎた後も継続し、今日にまで至っている。⁴²⁾ しかしながら、国家の象徴としてのヒンディー語の役割が、独立後のインドにおいてある程度受け入れられ、定着したことも事実である。また、教育を通じて、あるいはそれ以上に、テレビの普及やヒンディー映画などの「政策」以外の要因によって、広範な人々がヒンディー語に触れる機会をもつようになっている。現状では、南インドを含むインド各地で、読み書き能力は不十分である

37) ガーンディーはヒンドゥスターニー語の普及のために自らも複数の組織を設立している [Lelyveld 2001: 72; Orsini 2002: 361-362].

38) 詳細については、[CWMG LXXIX: 178, LXXX: 181, LXXXII: 9; Orsini 2002: 358-365] 参照。

39) インド憲法制定過程において、言語に関する条項をめぐってどのような議論が交わされたのかについては、[藤井 1994a, 1994b; Austin 1966: 265-307; *Constituent Assembly Debates* 1966: 1312-1491] 参照。

40) ただし、連邦の公的目的のために用いられる数字としては、インド数字の国際的形態（英数字）が選ばれている。なお、憲法におけるヒンディー語の位置づけは、連邦レベルの「公用語」であり、「国語」ではない点にも留意したい。

41) 連邦公用語としてサンスクリット語を推す動きについては、[Ramaswamy 1999: 353-360] 参照。サンスクリット語の利点として挙げられていたのは、公用語として選ばれた場合に、特定の人々にのみ有利になることがない点、インドの諸言語にはサンスクリット語の語彙が多数含まれている点、「全インド的な」言語である点、インドの精神性や文化と結びついている点、などであった。また、制憲議会の議論では、西洋の学者によるサンスクリット語への評価などを引用しながら、サンスクリット語の「偉大さ」が世界的に認められていることを主張する声もあった。

42) 独立後もインドにおいて英語は独自の発展を続け、使用人口がエリート層に限られるとはいえ、いまやインドの言語のひとつとしてみなしうるほどに定着している。インドにおける英語・英語文学の発展に関しては、[井坂 2007] 参照。独立後のインドにおける言語状況全般については、[King, R. D. 1998; 鈴木 2001] などを参照。

にせよ、ヒンディー語会話を理解できる人々の層は独立前に比べて着実に拡大していると思われる。

ガンディーの言語・文学観が、独立後のグジャラートやインドでどのような役割を果たしたのかについては、さらに詳細な検討が必要である。ここではその手がかりとして、ガンディーの主張が 19 世紀以降の知識人層の言語・文学改革の諸要素を継承しており、しばしば既存の知識人層の指導的役割を強化していたことや、そのことが、インドやグジャラートが政治的に脱植民地化する過程で、「上からの」言語・文学観に沿うかたちで言語状況が再編されるのに貢献した可能性を指摘するにとどめる。ただし、前述のように、近年、それまで「方言」とされていた言語に公的な地位を与える動きや、ダリト文学の成長など、以前とは異なる言語・文学のあり方が模索されていることにも留意したい。現時点ではまだその影響力は限られているものの、今後、これらの動きが、グジャラートやインドの言語・文学をどのように変えていくのかにも注目する必要があるだろう。

引用文献

- Austin, G. 1966. *The Indian Constitution: Cornerstone of a Nation*. Bombay: Oxford University Press.
- The Collected Works of Mahatma Gandhi (CWMG)*, 100 vols. 1958-1994. New Delhi: The Publications Division, Government of India.
- Constituent Assembly Debates: Official Report*, Vol. 9. 1966. New Delhi: Lok Sabha Secretariat.
- Dave, R. R. 2005. *Gujarati Sahityano Itihas*, 5. Amdavad: Gujarati Sahitya Parishad.
- . 2006. *Gujarati Sahityano Itihas*, 6. Amdavad: Gujarati Sahitya Parishad.
- Desai, B. N. 1918. Parsi Gujarati, *Indian Education*, March: 355-362.
- Desai, N. 1995. *The Fire and the Rose: Biography of Mahadev Desai*, translated by Chitra Desai. Ahmedabad: Navajivan.
- 藤井 毅. 1994a. 「インド憲法制定過程における言語問題の推移 (Ⅰ)」 『アジア経済』 35(4): 2-24.
- . 1994b. 「インド憲法制定過程における言語問題の推移 (Ⅱ)」 『アジア経済』 35(5): 2-20.
- . 2000. 「『多言語社会』 において『単一言語』 が指向されるとき—インドの歴史経験は、何を語るのか」 『ことばと社会』 3: 032-056.
- Gandhi, M. K. 1956. *Thoughts on National Language by M.K. Gandhi*. Ahmedabad: Navajivan.
- . 1962a. *The Problem of Education by M.K. Gandhi*. Ahmedabad: Navajivan.
- . 1962b. *True Education by M.K. Gandhi*. Ahmedabad: Navajivan.
- . [1927] 1992. *An Autobiography or The Story of My Experiments with Truth*, translated by Mahadev Desai. Ahmedabad: Navajivan.
- . [1924] 1994. *Dakshin Afrikana Satyagrahano Itihas*. Amdavad: Navajivan.
- . [1928] 1995a. *Satyagraha in South Africa*, translated by Valji Govindji Desai. Ahmedabad: Navajivan.
- . [1922] 1995b. *Hind Swaraj*. Amdavad: Navajivan.

- _____. [1938] 1995c. *Hind Swaraj or Indian Home Rule*. Ahmedabad: Navajivan.
- _____. [1927] 1995d. *Satyana Prayogo athva Atmakatha*. Amdavad: Navajivan.
- ガンディー, M.K. 2000a. 『ガンディー自叙伝 1 真理へと近づくさまざまな実験』 田中敏雄訳注, 平凡社.
- _____. 2000b. 『ガンディー自叙伝 2 真理へと近づくさまざまな実験』 田中敏雄訳注, 平凡社.
- _____. 2001. 『真の独立への道 (ヒンド・スワラージ)』 田中敏雄訳, 岩波書店.
- _____. 2005a. 『南アフリカでのサットィヤーグラハの歴史 1 非暴力不服従運動の誕生』 田中敏雄訳注, 平凡社.
- _____. 2005b. 『南アフリカでのサットィヤーグラハの歴史 2 非暴力不服従運動の誕生』 田中敏雄訳注, 平凡社.
- Gandhijino Akshardeh: Mahatma Gandhinam Lakhano, Bhashano, Patro vagereno Samgrah* (GA), Vol. 1-. 1967-. Amdavad: Navajivan.
- Government of Bombay. 1958. *A Review of Education in Bombay State, 1855-1955*. Poona: Director, Government Printing, Publications and Stationery, Bombay State.
- Grierson, G. A. 1908. *Linguistic Survey of India*, Vol. IX, *Indo-Aryan Family: Central Group, II*. Calcutta: Office of Superintendent of Government Printing.
- 弘中和彦・ガンディー・タゴール. 1990. 『万物帰一の教育』 明治図書.
- Isaka, R. 2001. M.K. Gandhi and the Problem of Language in India, 『Odysseus: 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』 5: 132-145.
- _____. 2002. Language and Dominance: The Debates over the Gujarati Language in the Late Nineteenth Century, *South Asia* 25(1): 1-19.
- 井坂理穂. 2003. 「植民地期インドにおける新聞・雑誌と言語改革」 『文学』 4(1): 60-69.
- _____. 2006. 「植民地期インドにおける歴史記述ーパールシーの書く『自分たち』の歴史」 甚野尚志編 『歴史をどう書くか』 講談社, 178-199.
- _____. 2007. 「インド近現代史とインドの英語小説」 『英語青年』 CLII(10): 9-11.
- Jhaveri, M. 1978. *History of Gujarati Literature*. New Delhi: Sahitya Akademi.
- King, C. R. 1994. *One Language, Two Scripts: The Hindi Movement in Nineteenth Century North India*. Bombay: Oxford University Press.
- King, R. D. 1998. *Nehru and the Language Politics of India*. New Delhi: Oxford University Press.
- Kothari, R. 2001. Short Story in Gujarati Dalit Literature, *Economic and Political Weekly* XXXVI(45): 4308-4311.
- _____. 2006. *Translating India: The Cultural Politics of English*. New Delhi: Foundation Books.
- Kumarappa, B. ed. 1951. *Basic Education by M.K. Gandhi*. Ahmedabad: Navajivan.
- _____. ed. 1953. *Towards New Education by M.K. Gandhi*. Ahmedabad: Navajivan.
- Lelyveld, D. 2001. Words as Deeds: Gandhi and Language, *The Annual of Urdu Studies* 16: 64-75.
- Macwan, J. 2004. *The Stepchild: Angaliyat*, translated by Rita Kothari. New Delhi: Oxford University Press.
- Mehta, M. 2005. Gandhi and Ahmedabad, 1915-1920, *Economic and Political Weekly* XL(4): 291-299.
- Modi, B. 1991. Standardization of Gujarati, *Indian Journal of Applied Linguistics* XVII(1): 89-108.
- Munshi, K.M. 1935. *Gujarata and Its Literature: A Survey from the Earliest Times*. Bombay: Longmans, Green.
- _____. 1940. *I Follow the Mahatma*. Bombay, Calcutta: Allied Publishers.
- Orsini, F. 2002. *The Hindi Public Sphere 1920-1940: Language and Literature in the Age of Nationalism*.

- New Delhi: Oxford University Press.
- Prabhu, R. K. ed. 1958. *Evil Wrought by the English Medium*. Ahmedabad: Navajivan.
- Ramaswamy, S. 1997. *Passions of the Tongue: Language Devotion in Tamil India, 1891-1970*. Berkeley, London: University of California Press.
- _____. 1999. Sanskrit for the Nation, *Modern Asian Studies* 33(2): 339-381.
- Report of the Thirty-fifth Session of the Indian National Congress, held at Nagpur*. 1920.
- Sarth Gujarati Jodnikosh*. 2003. fifth edn. Amdavad: Gujarat Vidyapith.
- Suhrud, T. 2004. 'Re-editing' Gandhi's Collected Works, *Economic and Political Weekly* XXXIX(46-7): 4967-4969.
- 鈴木義里. 2001. 『あふれる言語, あふれる文字 インドの言語政策』 右文書院.
- Taylor, J. V. S. 1867. *Gujarati Bhashanum Vyakran*. Surat: Irish Mission Press.
- Trivedi, R. K. ed. 1967. *Census of India, 1961, Vol. V, Gujarat, Part X-A(i), Special Report on Ahmedabad City*. Delhi: The Manager of Publications.
- Yagnik, A. 1998. My Mother Tongue, *Seminar* 470: 58-62.
- Yagnik, I. 1967. *Atmakatha*, 1. second edn. Amdavad: Ravani Prakashan Grha.